

# 日本人英語学習者の習熟度に応じた聴解難易度 予測式の構築

上田 翔太\*, 吉見 毅彦\*, 南條 浩輝\*, 小谷 克則\*\*

## A Listenability Formula Using Listening Proficiency Level Information of Japanese Learners of English as a Foreign Language

Shota UEDA\*, Takehiko YOSHIMI\*, Hiroaki NANJO\*, Katsunori KOTANI\*\*

### 1. はじめに

近年、インターネットの普及などにより国際化や情報化が進み、コミュニケーションの手段として英語を使用する機会が増えている。これにつれて、コミュニケーションに必要な聴解力を習得することがますます重要になってきている。

日本語を母語とする英語学習者（以下、学習者）に実践的な聴解能力を習得させるためには、より多くの教材を活用できるように、既製の聴解学習用教材だけではなく、インターネットなどを通じて配信されるさまざまな現実の音声資料を教材として利用することが望ましい。その際、学習者の習熟度に応じた聴解難易度<sup>1</sup>の音声資料を選択することが重要となる。しかし、既製の聴解学習用教材とは異なり、現実の音声資料には聴解難易度は通常付与されていない。このような場合、学習者の習熟度に応じた音声資料の選択を学習者自身が行うことは困難であり、また教員が行うには膨大な労力がかかる。

この問題への対策として、聴解難易度を自動的に測定する予測式<sup>(1)(2)</sup>が提案されている。また、読解難易度予測式<sup>(3)(4)</sup>を援用した手法も示されている<sup>(5)</sup>。これらは、2章で述べるように、文の言語的特徴に基

づく予測式である。

しかし、これらの予測式は学習者の習熟度に応じたものではないため、聴解学習用教材の聴解難易度を測定することには問題がある。なぜなら、母語話者は学習者に比べると習熟度に個人差が小さいため予測式は個人の習熟度に応じたものである必要はないが、学習者は個人によって習熟度にばらつきがある<sup>(6)</sup>ため個人の習熟度に応じたものでなければならないからである。

そこで、本研究では、学習者の習熟度に応じた聴解難易度の音声資料を（半）自動的に選択できる機能を備えた英語学習支援システムの開発の一環として、学習者の習熟度に応じた聴解難易度予測式を構築した。聴解難易度の予測においては、文の言語的特徴と学習者の習熟度の両方を考慮することが重要であるが、前者については従来研究が存在するため、本稿では後者に重点を置く。従来の予測式の問題への具体的な対処方法については、3章と4章で述べる。5章では本研究の予測式の評価実験を行う。なお、本稿は文献(7)に基づいている。

### 2. 従来研究

Messerklinger<sup>(5)</sup>は、読解難易度予測式のFlesch<sup>(3)</sup>

\*龍谷大学 (Ryukoku University)

\*\*関西外国語大学 (Kansai Gaidai University.)

受付日：2013年5月9日；再受付日：2013年9月2日；採録日：2013年11月26日

<sup>1</sup>学習者にとっての聴解難易度には、R（流）音とL（口唇）音、B（両唇）音とV（歯）音などの調音点の弁別の特徴から生じる聴解難易度と、音声によって発せられる文の理解しやすさという聴解難易度の両面がある。本稿では後者の聴解難易度を対象とする。